

## 今井町三井邸の能舞台に関する考察

A study on the Noh stage of Mitsui residence at Imaicho

奥 富 利 幸  
Toshiyuki OKUTOMI

### 1. はじめに

明治期から昭和初期にかけて、能楽を趣味とする実業家が、自宅や別荘に能舞台を建てたが、これらの能舞台は住宅邸内の接客用座敷の前庭に能舞台を建設することが常であった。これは、江戸時代の武家屋敷に建てられた能舞台と同様であり、まず、来賓に対する饗応能を演じるためということが第一の目的であったが、その他にも、上流社会の教養として自らが稽古に精を出すためでもあった。つまり、近代の華族邸宅などで建てられた能舞台には、近世以来の慣習が踏襲されていたことになる。そして、近世の武士が式楽として能の稽古に励んだように、近代に活躍した実業家も能楽を単なる趣味として愛好するというだけでなく、人生そのものと考えるほどに打ち込んでいたから、能舞台建設にける情熱も尋常なものではなかった。本論では、三井財閥の10代目の当主であった三井八郎右衛門高棟の今井町邸の能舞台について、住宅における能舞台の位置付け、饗応における能舞台とその周辺空間の使われ方、能舞台の仕様などを考察し、近代の華族邸宅における能楽空間の特色を検証してみたい。

### 2. 今井町邸の建設

今井町邸は、三井総領家の三井八郎右衛門高棟家の住宅として、麻布区今井町42番地に明治36年(1903)の春に着工し、明治41年(1908)の春に竣工した。建築の計画には、10代三井八郎右衛門高棟自らが関わり、工事監督にはベックマン貸費留学生としてドイツに渡った清水米吉が携わった。この住宅の特色は、江戸時代の書院造の武家屋敷と同様に、接客空間としての表向と居住空間としての奥向に区分されていることである。

### 3. 三井八郎右衛門高棟と能楽

多様な趣味人であった高棟が、何時から能楽に親しんでいたのかははっきりとしておらず、当時京都に本拠を構えていた明治18年(1885)1月の「福王流謡曲 初伝拾三番并独吟口之習免許目

録」により、福王流について稽古に励んでいたことがわかる。明治30年代中期からは、高棟の誕生日である1月14日を中心に新年会で梅若六郎を招くようになったという。高棟の次男高公によれば、「日露戦争時は、音曲の類をひかえていたようだ」とされるが、使用人たちには、続けて稽古をさせていたという。

### 4. 今井町邸の構成と能舞台

この住宅に関しては、この今井町邸で育った三井禮子の記述<sup>1</sup>がある。まず、高棟は、明治39年(1906)に、それまで住んでいた麹町区土手三番町(現千代田区五番町)から、麻布区今井町四二番地に居を移したという。つまり、能舞台開きが行われる2年前には、この住宅に引越していたことがわかる。そして、この邸宅(図1)の構成についてまとめると次のようになる。

- ・一階は概ね三つのエリアに区分される。
- ・中央から東側に接客用の応接間、能舞台と付属室、三間つづきの大書院、小書院、四季の間などがある。
- ・中央より南西部分は高棟夫妻の居室で、居間、化粧の間、寝室、書斎などがある。
- ・中央から北西部分は、食堂、お次(使用人)の茶の間、台所、事務所、家扶部屋、下男部屋などがある。
- ・主屋のほかに三棟の土蔵、独立した三つの茶室がある。
- ・二階も、三つのエリアに分かれ、男子と女子の子供部屋とお次の部屋である。

この住宅では、一階に主要な諸室を置き、二階は子供と使用人の部屋になっていたことがわかる。二階建の華族住宅においては、一階に家長の対外的な公的空間を中心に添えて、二階を家族の私的空間を中心とする事例が多く見受けられる<sup>2</sup>。また、この住宅では、一階の平面がほぼ正方形であり、中心部で南北東西に四等分して空間的境界を設定すると領域の区分とほぼ一致する。つまり、

最も公的な性格が強いのは北東部分で、ここには、玄関と家扶の事務室、表座敷、能舞台（図2）などの諸室があり、外部との接触の頻度が高い部屋が集中している。続く南東部分では、公的空間としての使われ方と私的空間としての使われ方が重なったところで、書院、次之間（図3）、三之間、中之間などがある。ここでは、普段は家族の憩いの場として使われるわけだが、北東部分にある能舞台の見所としての機能も持ち合わせており、賓客の応接室ともなるように設計されている<sup>3</sup>。次に、南西部分は、家長夫妻の生活空間を中心として、家族が使用する場所である。つまり、この住宅の中で最も私的な性格が強い部屋が集まっている。ここには、居間、化粧の間、寝室、書斎などがある。そして、残った北西部分には、食堂、お次たちの茶の間、台所、女中や下男の部屋、土蔵などがあり、使用人が仕事をする部屋が中心に構成されている。

このように、この住宅では、正方形平面の北東側から南東側に向かう対角線に沿って、徐々にプライバシーが高い空間が配置されていることがわかる。そして、能舞台のある場所は、北東部分であるが、見所が南東部分に設定されていることで、公的な使い方と私的な使い方の双方で能舞台が使える配置となっていることがわかる。こうした能舞台の配置は、他の能舞台を持つ上級住宅でもみられ、特に、玄関の背後に構える配置は、野村徳七の碧雲荘能舞台<sup>4</sup>でも使われている。

### 5. 能舞台の仕様

能舞台は、住宅の北東部分に玄関と背中合わせで、南側を正面として配置されている。通常は三間四面の和風洋室になっており、普通の居室として使えるように工夫されていた。そして、この洋室の扇の障壁画が描いてある四面の襖を全て取り払うと能舞台となる。つまり、建具の敷居を裏返して、絨毯をとり除くと能舞台に仕立てられるわけである。床下には大襖を三つ置かれていて、音響上の配慮がなされていた。また、普段は手すり付きの斜め廊下が橋掛りとなり、その先にある部屋が鏡の間になった。能舞台の正面と脇正面側は、白砂利が敷かれた白州になっており、白州を挟んで、正面側に三之間、脇正面側に表座敷がある。したがって、三之間の回りの襖を外すと見所になった。舞台の構造は、鼯鼠の能楽師であった

梅若能楽堂の能舞台<sup>5</sup>を参考にしたという。因みに、梅若能楽堂の能舞台とは、明治期を代表する能楽師の梅若実が明治初期に青山下野守邸から譲り受けた能舞台で、大正6年（1919）に梅若能楽堂内に移築された。能舞台の造営にあたり、由緒ある舞台を参考にすることはしばしば行なわれているが、自分の師匠の能舞台を尊ぶ傾向は現代でも強く、この舞台が師匠の梅若師の能舞台を参考にすることはむしろ自然のことであった。また、舞台鏡板絵は、川端玉章の揮毫とされ、他の上之間、次之間、三之間の襖や小壁などの障壁画も川端の筆になるものであった。川端玉章は当時、東京美術学校の教授を務め、その後、川端画学校を創立して後進の指導に当たることになる。

### 6. 能舞台での催能

能舞台は、明治41年（1908）5月31日に舞台開きが行なわれ、大正11年（1922）4月21日には、英国皇太子エドワード<sup>6</sup>を迎えての饗応能が催された。英国皇太子の訪日計画にあたり、大正11年の年頭に、宮内省から三井家に打診があった。高棟は、三井合名会社や同族会の理事と協議して検討に入った。当時は、綱町にジョサイア・コンドル設計の綱町三井別館<sup>7</sup>があったが、洋館より日本座敷や能舞台もある今井町邸がよかろうということになったという。実は、綱町三井別館の2階にも能舞台が設置されていたが、簡易な敷舞台であった。欧米の視察で、あちらの文化や文物の紹介を受けて感銘した高棟は、逆に、欧米の賓客に日本の文化を紹介したいという意欲があったものと考えられる。また、近代の能楽が、外国貴賓の饗応芸能として復興してきたことの延長線上にこの催しもあったことになる<sup>8</sup>。高棟は、建築、家具、飾り付け、食事、催物、おみやげ、当日の服装、暖房に至るまで、並々ならぬ気遣いをしたという。当日の訪問の次第は次の通りである。

- ・午前9時半に今井町邸における新聞記者の内見をすませ、午後3時には各出入口を封鎖する。
- ・各掛員は午後5時に参邸して、担当部門に配置される。
- ・午後6時に三井各家当主と夫人、宮内省奏楽師、能楽の梅若一門らが到着し、午後7時過ぎに三井家同族と夫人たちが玄関に整列して出迎えの準備が整う。
- ・午後7時10分、東伏見宮夫妻、続いて7時30分、

エドワード皇太子が到着した。高棟・苞子以下同族一同が出迎え、挨拶を交わした。

・一時間ほどの晩餐会が終り、皇太子一行を円山応挙の三幅対や鎧の飾ってある四季の間や能装束、能道具、五月人形を陳列してある席画室（小書院）へ案内した。高棟が英国皇太子に、陳列品の説明をしたり、大鼓や小鼓を打ってみせると、皇太子も自分で鳴らして、茶目つけたっぷりであったという。席画室では、池上秀畝が紅葉に鹿、狩野探令が破墨山水を揮毫した。

・皇太子と随員は席画を鑑賞した後、能観覧席である菊の間と武蔵野の間に移った。

・午後8時頃から、三井各家の家族や三井各社の重役らが夜会に出席するため、今井町邸に参集し、書院や溜の間でコーヒーの接待を受けた。

・夜会参加組も含めて一同が能見所に集まったところで、午後9時過ぎ、能が開演された。

・梅若万三郎、六郎らによる鬼六人揃の新案をこらした「紅葉狩」が演じられ（図4）、英訳した「紅葉狩」説明書<sup>9</sup>と、五線譜に直した楽譜が配られた。

・皇太子は能が殊の外気に入った様子で、希望によりさらに四人獅子舞の「石橋」を追加したため、予定時間を超過した。

当日の英国皇太子訪問に対する饗応として、晩餐会の後、家什の陳列御覧、席画室での揮毫、能観覧と行われたが、これは、天皇行幸の式次第と見紛う程に似ている。つまり、明治期の天皇行幸においては、行幸前に宮内省からの打診があり、打診を受けた華族家では、洋館の準備を検討する。つまり、当時の行幸では洋館に便殿を置くことが多く、行幸の当日は、洋館と和館を巡って、1日をかけて天皇を饗応したのである<sup>10</sup>。このときは、能楽が定番の饗応芸能であった。これは、英照皇太后が能楽を好み、明治天皇と一緒に御覧になることが多かったことの影響と考えられる<sup>11</sup>。したがって、このときの英国皇太子訪問においても、家什の陳列御覧、席画室での揮毫、能観覧という進行は、天皇行幸を参考として計画されたと考えられよう。さらに、このときには晩餐会場として、「三井饗所」が急遽、二ヶ月の突貫工事で新築されているが、これも、行幸に合わせて建設された行幸御殿を思わせる。しかし、ここでは、天皇ではなく、外国貴賓のために、会場が準備され、饗

応が行なわれたのである。

## 7. まとめ

能舞台を持つ近代華族住宅として今井町三井邸を考察した結果、次の点が明らかになった。

・住宅内における公的と私的空間の区分による空間配置においては、近世武家住宅と同様に表向と奥向に区分されており、能舞台は公的と私的な使い方がされることを前提に配置されていた。

・能舞台の仕様では、師匠に当たる梅若能楽堂の能舞台が参考にしているが、普段は能舞台が住宅の居室としても使えるように設計されている。

・能舞台で演能が行なわれる際には、向かい側にある座敷が見所に当てられ、座敷は和室の仕様ではあっても、絨毯が敷かれて椅子式の空間で造られていた<sup>12</sup>。

・外国貴賓訪問では、明治期の天皇行幸と類似した内容で饗応がなされた。

・饗応芸能として能楽が演じられ、行幸と同様に和館の前庭の白州にある能舞台で行なわれた。

英国皇太子の饗応能が実施された大正期は、能楽が華族の庇護を離れ、伝統芸能として自立してゆく時期である。したがって、近世の武家屋敷の形式を引き継ぐ華族邸宅の能舞台は、その名残を残す最後の能楽場となった。これ以降の演能場の中心は、劇場である能楽堂となり、現在に至った。

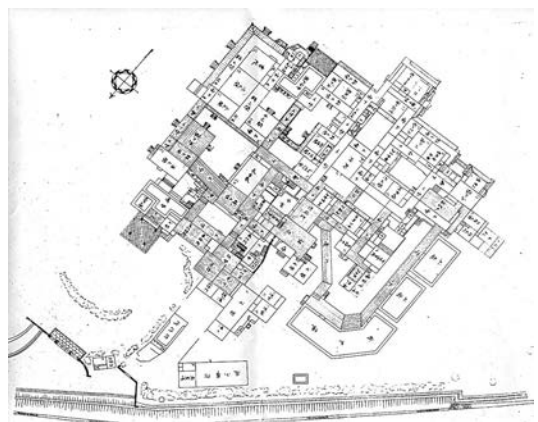


図1. 三井今井町邸一階平面図  
（『建築雑誌』1911年）

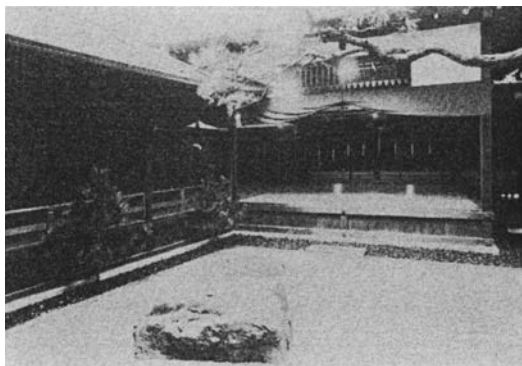


図2. 三井今井町邸能舞台  
(『三井八郎右衛門高棟傳』1988年)

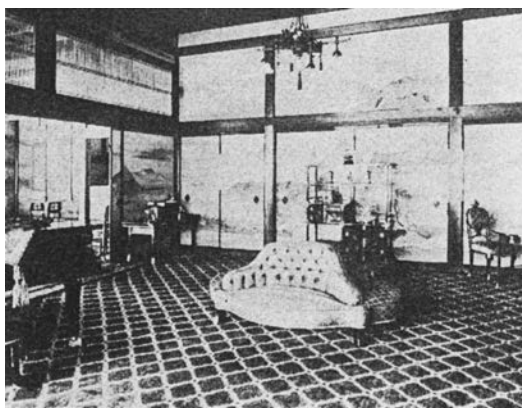


図3. 三井今井町邸次之間  
(『三井八郎右衛門高棟傳』1988年)



図4. 三井今井町邸エドワード皇太子饗応能「紅葉狩」  
(『三井八郎右衛門高棟傳』1988年)

化をしている。奥富利幸・富松幸恵・林真由子・山口明日香・山田裕樹『昭和初期の和洋折衷華族住宅に関する考察—細川護立邸を通して』小山工業高等専門学校研究紀要36号平成16年3月

3 三井禮子「記憶の限りでは、三間とも絨毯が敷きつめられ、大きなグランドピアノや三方から腰かけられるアームチェア、洒落た椅子にテーブルなどが置かれていた。のちにはそこでピアノや声楽のレッスンを受けた。」『三井八郎右衛門高棟傳』三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編1988年3月

4 碧雲荘は野村財閥の創立者である野村徳七が京都南禅寺塔頭跡地に造営した別荘で、永観堂通りに面した表門から入った大玄関の裏側に能舞台が設置されている。奥富利幸「碧雲荘能舞台」2001年9月日本鉄鋼連盟『亜鉛鉄板』Vol.45号No6, pp19-21

5 明治維新後に自宅に二間、三間の板の間で稽古を始めた梅若実が苦勞の末、観世銚之丞などと連帯して譲りうけた能舞台。梅若実「舞台を得るまで」『能楽』1903年

6 エドワード8世 (Edward VIII, Edward Albert Christian George Andrew Patrick David Windsor, 1894 - 1972)

7 明治43年に高棟が欧米を視察し、帰国後に迎賓館の必要性を認識して、三田綱町にジョサイア・コンドルの設計で建てた三井家の迎賓館（大正2年12月竣工）。現在の綱町三井倶楽部。

8 明治4年11月から欧米を回覧した岩倉具視が帰国後に饗応芸能として能楽の妥当性を認識し、能楽社を設立する。回覧に同行した久米邦武によれば、岩倉はオペラに匹敵する芸能として能楽を想起したという。奥富利幸「明治初期における能楽堂誕生の経緯—青山御所能舞台、能楽社の建設を通して」2002年3月『日本建築学会計画系論文集』第565号, pp337-342

9 大正4年12月7日に宮中で行なわれた「御大典祝賀能」では、外国賓客向に筋書きがフランス語に翻訳された。池内信嘉『能楽盛衰記下巻・東京の能』1925年1月

10 明治43年7月8日前田利為邸行幸では、拝謁、下賜、献上、絵画・家什御覧、能楽御覧、琵琶演奏などの一連の行事が利為邸の洋館と和館を巡って行なわれた。奥富利幸「近代華族住宅の行幸における和洋館の使い分けについて—明治43年7月8日前田利為邸行幸を通して」2002年8月日本建築学会大会（北陸）梗概集, pp337-338

11 明治期の行幸能は前期に多く催され、英照皇太后の嗜好との関連が強いと考えられる。奥富利幸・富松幸恵「明治期の行幸啓における能楽場の分類について」2004年8月日本建築学会大会（北海道）梗概集, pp373-374

12 明治11年に竣工した青山御所能舞台では、能舞台の見所となる座敷には絨毯が敷かれ、そこに置かれた椅子で、英照皇太后や明治天皇が能楽を御覧になっている。奥富利幸「明治初期における能楽堂誕生の経緯—青山御所能舞台、能楽社の建設を通して」2002年3月『日本建築学会計画系論文集』第565号, pp337-342

1 三井禮子「今井町邸について」『三井八郎右衛門高棟傳』三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編1988年3月  
2 細川護立邸では、1階に接客空間を中心とした諸室を配置して、2階に家族の私的空間を中心に、賓客用の和室を配置した。2階の賓客用の和室には、皇族などの上位の賓客を通し、1階と2階で接客空間の序列